

【特別支援学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度(評価)  
 A: 十分達成できている  
 B: おおむね達成できている  
 C: やや不十分である  
 D: 不十分である

学校名	佐賀県立盲学校
1 前年度 評価結果の概要	・自立と社会参加に向けた力の育成のために、保護者や関係機関と連携を取りながら、幼児児童生徒の実態に応じた支援・指導を行った。 ・専門性向上に向けた研究・研修の充実のために、職員研修等を通して専門性の向上に努めた。また、力を引き出す授業の実践を念頭に校内研究を進めた。 ・「目の支援センター ゆうあい」を中心に、関係諸機関とも連携しながら、弱視学級との連携や、地域に対する支援、啓発活動等を行い、センター的機能を周知することができた。
2 学校教育目標	視覚に障害のある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行い、自立と社会参加及び心豊かな人格の形成を目指す。 - 明朗・友愛・自立 -

3 本年度の重点目標	『夢をはぐくみ、未来をひらく盲学校』～「ほめる」からはじめる。はじまる。そのために「知ろう」～ (1) 自立と社会参加に向けた力の育成(幼児児童生徒) (2) 専門性向上に向けた研究・研修の充実と力を引き出す授業の実践(教職員) (3) 視覚障害教育センター的機能の充実と周知(社会・地域)
------------	--

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

評価項目	重点取組	成果指標(数値目標)	具体的取組	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
				達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○幼児児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着	○「学力の定着が図られた」「自立活動や各教科等を合わせた指導における指導と評価が適切に行われた」と回答する教員・保護者80%以上	・個々の実態を的確に把握するとともに、学習内容及び方法を適切に設定し、学習評価を通して効果的な学力の向上を図る。 ・全国および県の学力・学習状況調査やSAGAテスト、単元テスト、点字テスト、珠算検定等各種検定等を通して個々の学力の把握に努める。 ・自立活動の指導内容及び方法、評価等を適切に実施する。 ・各教科等を合わせた指導では、個々の実態に応じた適切な指導の在り方に留意するとともに、教科の視点を踏まえて計画、指導にあたる。	A	・80%以上の教員・保護者が「幼児児童生徒一人一人に応じた適切な指導・支援により、学力の定着が図られている」、「自立活動や各教科等を合わせた指導における指導と評価が適切に行われている」と回答した。 ・個々の幼児児童生徒の実態や指導上の課題を職員間で共有し、適切な指導に努めた。	A	・少人数、マンツーマンで、一つ一つの授業を大切にされているのがよくわかった。 ・複数人の授業がより刺激が多く、集団の学習の場も必要だと思う。	各学部主事
	●幼児児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「将来の自立と社会参加に向け、生きる力や豊かな心を身につけさせる指導が、発達段階に応じて適切に行われた」と回答する教員・保護者80%以上	・幼児児童生徒一人一人の夢や希望をふまえ、学校生活のあらゆる場面で支援と働きかけを行い、生きる力を育てる。 ・防犯、薬物、性教育講話等、さまざまな角度から人権意識の向上に努める。 ・幼児期から特別活動や学校行事等への参加を通して望ましい人間関係を形成し、集団意識を高め、他者への思いやりや社会性を養う。 ・点字ブロック啓発活動や龍谷高校サッカー部との交流などをとおして、社会性や協調性を育てる。	A	・80%以上の教員・保護者が「将来の自立と社会参加に向け、生きる力や豊かな心を身につけさせる指導が、発達段階に応じて適切に行われた」と回答した。 ・薬物乱用防止教室、いじめに関する講話、がん教育講話や特別活動、行事等を通して、社会的自立に向けての心構え、自他の生命を尊重することについて学んだ。	A	・特になし	生徒指導主事
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取り組みの充実	○「幼児児童生徒が安心して学ぶことができる環境作りを認め、一人一人の不安や悩みに寄り添いながら、いじめのない学校作りに取り組んでいる」と回答する教員・保護者80%以上	・学校生活アンケートを実施して一人一人の心の状態を把握し、安心して学べる環境づくりに努める。 ・教育相談体制を充実させる。 ・スクールカウンセラーによる講話と演習を通して自己解決能力を高める。	A	・80%以上の教員・保護者が「幼児児童生徒が安心して学ぶことができる環境作りを認め、一人一人の不安や悩みに寄り添いながら、いじめのない学校作りに取り組んでいる」と回答した。 ・学校生活アンケート(年2回)を実施し、嫌な思いをしたという児童生徒はいなかった。 ・学部と生活指導部が連携を取りながら対応できた。また、スクールカウンセラーとも連携し担任団と学部で組織的な支援ができた。	A	・特になし	生徒指導主事
	●◎幼児児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した幼児児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした幼児児童生徒80%以上	・自分の役割を理解し、果たそうとする態度や意欲、コミュニケーションの方法等を身につけさせる。 ・自立心を培い、自主的・意欲的に自分らしく生きる力を育む。	A	・日々の生活指導や細やかな面談等を通して、幼児児童生徒の自己肯定感の醸成に努めた結果、80%以上の幼児児童生徒が「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した。 ・進路に対する不安を払拭できるよう、相談体制の充実と、具体的な進路指導の強化に努めた結果、80%以上の幼児児童生徒が「将来の夢や目標を持っている」と回答した。	A	・保護者も含めて進路については早くから相談体制を確立する。 ・卒後のことがどれだけイメージできるか早いほど準備はできると思う。	各学部主事
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○「健康観察簿」の記入・提出状況100% ○「日々の健康チェックを通し、将来の自立と社会参加に向けた生活習慣の確立に努めている」と回答する教員・保護者80%以上	・「健康観察簿」への記入と活用を促し、健康チェック(朝食・歯磨き・検温)の習慣を身につけさせる。 ・「保健だより」を毎月発行し、基本的な生活習慣の形成に役立つ情報を発信する。 ・長期休業前に生活指導と保健指導の両面から講話や資料の配布を行い、生活習慣形成への意識付けを行う。	A	・80%以上の教員・保護者が「日々の健康チェックを通し、将来の自立と社会参加に向けた生活習慣の確立に努めている」と回答した。 ・「健康観察簿」を通じて健康状態を把握し、毎日の健康チェックへの意識づけができた。 ・感染症対策としては、インフルエンザや新型コロナウイルス等、換気や手指消毒などの啓発を行い予防対策に努めた。	A	・特になし	生徒指導主事
●地域支援	●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○「相談支援活動や啓発・広報、地域の見えにくさのある幼児児童生徒への有効な教育的支援が効果的に行われている」と回答する教員80%以上	・見え方に困難のある幼児・児童・生徒・成人の相談に応じ、適切に支援を行う。 ・地域や関係諸機関に対し、本校や視覚障害教育についての啓発・広報活動等を計画的に行う。 ・弱視学級や見えにくさのある幼児児童生徒の所属校等と連携し、研修会の実施や定期的な情報提供等を行う。 ・巡回相談を行う学校・園に対し、実態や状況に応じた助言を行う。	A	・全ての教員が、「相談支援活動や啓発・広報、地域の見えにくさのある幼児児童生徒への有効な教育的支援が効果的に行われている」と回答した。 ・予定していたゆうあい教室や啓発・広報活動、視覚障害教育についての情報発信等を計画的、継続的に行うことができた。 ・巡回相談を各校の要請に伴い随時行い、ニーズに応じた助言等を行った。	A	・弱視教育の専門性の維持が必要 ・学校全体の協力体制が必要	相談支援部主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	○月の時間外在校時間が45時間を超える職員の割合が5%未満	・定時退勤日を設定し、計画的に業務を行う。 ・必要に応じて学校行事や各職務分掌等の業務内容を見直す。 ・休暇が取りやすい環境づくりに努める。	A	・4月～2月までの月の時間外在校時間が45時間を超える職員の割合が0.4%であった(10月～1月までの割合は0%)。4月に増加傾向がみられるので、年度始めの時間内業務の意識付けが肝要である。 ・特定の職員について、実際に業務の負担の大きさについての検証が必要である。	A	・同じ公務員として月の時間外在校時間が45時間を超えないことが普通なので、月の時間外在校時間が45時間を超える職員の割合が5%未満は成果指標としては甘く感じる。	教頭 事務長
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目								
○キャリア教育及び職業教育の充実	○卒業予定者の夢や希望を尊重し、ニーズに応じた進路指導の充実	○進路についての意見を十分に聞き、適切な指導がなされていると回答する職員、保護者が80%以上 ○進学および就職、障害福祉サービス利用等、卒業予定者全員の進路先確保	・進路希望に応じた、課題テストや模擬試験、補習等の実施、指導支援を行う。 ・就労や障害福祉サービス等、関係機関への視覚障害の理解啓発と新規進路開拓を行う。 ・進路講演会・懇談会、進路情報などを通して、適切な勤務観や職業観を育み、将来の進路についての意識を高める。	A	・80%以上の職員、保護者が進路についての意見を十分に聞き、適切な指導がなされていると回答した。 ・進路希望に応じた内容の補習や模擬試験、実習の実施を行い、進路実現に向けて意識を高めることができた。 ・卒業予定者、在校生の進路を見据え、企業や行政への理解啓発を行うことができた。 ・計画通り研修会や懇談会、講演会の実施、進路情報を発行することができた。 ・卒業予定者の進路先を確保することができた。	A	・特になし	進路指導主事
	○校内研究・職員研修の充実	○「校内研究・職員研修により指導力が向上した」と回答する教員80%以上 ○「校内研究・職員研修の充実がもたらしている」と回答する保護者80%以上	・校内研究・職員研修を計画的に実施し、視覚障害教育の専門性の向上、授業実践指導力の向上を図る。 ・新転任者研修や校内スキルアップ研修、外部講師による授業参観指導等を実施するとともに、出張報告会を通して研修の成果を共有化し、視覚障害教育の指導力・専門性の向上を図る。	A	・新転任者向けの研修会を12回、その中の4回は地域の学校向けに公開講座として実施した。また、スキルアップ研修を6回、外部講師による研修を2回実施した。 ・校内授業参観週間を設け、互いに見て学び合い、授業改善に繋げた。 ・「校内研・職員研修により指導力が向上した」と回答した職員は100%で、保護者も100%であった。 ・校内研究は、昨年度の研究を更に推し進め、各学部で『研究報告』にまとめ共有し、研究研修を推進した。	A	・特別支援教育の教育課程、自立活動の個別の指導計画の作成なども研修をする必要があると思う。	研究研修部主任
	○寄宿舎における生活指導	○「寄宿舎生一人一人の実態に合わせ、自立に向けた支援指導が達成された」と回答する指導員・保護者80%以上	・寄宿舎生一人一人の実態把握を綿密に行い、ケース会や研究会を通して共通理解を図りながら、指導員全体で最も適切な支援を行う。	A	・100%の指導員・保護者が「寄宿舎生一人一人の実態に合わせ、自立に向けた支援指導が達成された」と回答した。 ・日々の連絡会や定期的な情報交換で舎生の情報を共有し、意見交換をすることができた。また、学校担任団や保護者との共通理解のもと、連携を取りながら自立に向けた適切な支援指導を行うことができた。	A	・特になし	寮務主任 主任寄宿舎指導員
	●●●果共通 ○●●学校独自 ○●●志を高める教育	今年度は『夢をはぐくみ、未来をひらく盲学校』～「ほめる」からはじめる。はじまる。そのために「知ろう」～を掲げ、3つの重点項目を定めた。重点項目の達成に向け、それぞれの取組は年間を通して着実に実行できた。その結果、達成度は高い評価が得られ、保護者や学校評議員からも肯定的に評価していただいた。次年度は評価の観点を変えたり、成果指標の数値を上げたりし、よりよい学校運営に取り組んでいきたい。今後も県内唯一の視覚特別支援学校として、保護者、学校評議員からいただいた意見や提言を取り入れながら、更なる指導力向上のため研修体制の充実と努めていきたい。また、一人ひとりが安心して学ぶことができるよう、不安や悩みに寄り添う学校づくりに取り組み、幼児児童生徒および保護者のニーズを汲み取った学校運営に努めていきたい。						

5 総合評価・次年度への展望	今年度は『夢をはぐくみ、未来をひらく盲学校』～「ほめる」からはじめる。はじまる。そのために「知ろう」～を掲げ、3つの重点項目を定めた。重点項目の達成に向け、それぞれの取組は年間を通して着実に実行できた。その結果、達成度は高い評価が得られ、保護者や学校評議員からも肯定的に評価していただいた。次年度は評価の観点を変えたり、成果指標の数値を上げたりし、よりよい学校運営に取り組んでいきたい。今後も県内唯一の視覚特別支援学校として、保護者、学校評議員からいただいた意見や提言を取り入れながら、更なる指導力向上のため研修体制の充実と努めていきたい。また、一人ひとりが安心して学ぶことができるよう、不安や悩みに寄り添う学校づくりに取り組み、幼児児童生徒および保護者のニーズを汲み取った学校運営に努めていきたい。
----------------	--